

## 2009年 GNOBLE 3期生

### 東大合格者ロングインタビュー①(桜蔭、女子学院出身者)

鈴木 結 (すずき ゆい) 東京大学文Ⅱ 女子学院

竹田 萌子 (たけだ もえこ) 東京大学文Ⅰ 女子学院

中岡 菜々子 (なかおか ななこ) 東京大学理Ⅱ 桜蔭

#### Q : 東大を目指したのはいつ、またどんな理由で？

竹田 : 中学受験をしたときに、女子学院と慶応義塾中学の両方とも受かって女子学院に行ったわけですから、もう必然的に慶応以上の大学を目指さなくてはという気持ちもあって、その頃から東大を漠然と意識はしていました。



鈴木 : 私はそもそも、大学に行こうかどうしようかというところで悩んでいた時期がありまして…。でも、将来ずっと働いていきたいという気持ちもあるものですから、女性が社会で働き続けるためには、それなりの学歴を身につけておいた方がいいかなと。これは単にいい大学をとということではなく、女子学院に入って思ったことなんです、やはり一緒に

いる人のレベルが高いと自分にとってもいい刺激になるんですね。大学に入るにしてもできるだけ高いレベルの人といただけるような学校をとということで、高校3年生の頃に東京大学を意識し始めました。

中岡：私の場合は高1の頃です。もともと家が近いというのもあって、東大には憧れもあったのですが、大きな決め手となったのは祖父の病気です。祖父母は山口に住んでいたのですが、祖母の手伝いをしに山口に行って病院の様子などを見ているうちに、医者になりたいなと思ったんです。理Ⅲの現役合格を目指すにはちょっと難しいかなということで、まずは理Ⅱにしてと。

**Q：東大へは「行けたらいいな」か「絶対行くぞ」か？**

中岡：絶対行くぞと思っていました。最初から「絶対行くんだ」という強い気持ちを持っていないと、やはり簡単なものではない



だろうなど。

鈴木：私は初めのうちは「行けたらいいな」という感じでしたが、次第に「絶対行くぞ」というふうに変わっていきました。将来は企業の中で働きながらも、社会を良くしていく意識を持っていたいと思っていて…たとえばエコロジーですとか。まだはっきり「何を」ということはありませんが、大学生活を送る中で何か発見できたらいいなと考えています。

竹田：私の場合は、小学校の頃から法曹になりたいという夢がありました。法律家になれるのであれば東大でなくてもいいと思っていましたから、「東大に行ければいいな」というくらいの感じでした。

## **Q : グノーブルに入ったきっかけは？**

中岡：高2の途中くらいで、それまで行っていた塾をやめました。ただただ英文をたくさん読んで、単語をまる暗記しているような感じの塾で、授業を受けていてあまり面白くなかつ

たんです。英語の本当の力が伸びているという実感もつかめませんでした。しばらく英語が放置され気味になり始め、さすがにこれは「まずいぞ」という気持ちが芽生えてきて、友人から「グノーブルの英語はすごくいいよ」という話を聞いたので入りました。

### **Q : 英語のグノーブル、その評判の裏づけは？**

竹田：私は、中2からグノーブルの先生にお世話になりました。テキストも宿題も質・量ともに充実していて、添削も毎回してくださるし、真剣に英語を学びたいという人にはしっかり応えてくれる授業だと思います。またリスニングの音声データを毎週ダウンロードして使えるようなシステムも整っていて、英語を学ぶことに関しては至れり尽くせりの環境が整っていると思います。

また、グノーブルでは、基本的な文法問題などは周期的に学べるようになっていて、忘れた頃に再び現れるというか、忘れさせない工夫、生徒が英語を自分のモノにでき

る工夫がいっぱいあるんです。

鈴木：私も竹田さんと同じ思いです。音声のダウンロードもそうですし、高3になると毎回授業で要約というプリントをやるんですが、その解答も携帯電話で見ることまでできたり、本当に英語の勉強をしようと思ったら「欲しいものは全部ある」という感じですか。生徒の身になって「こういうものがあれば便利だろう」ということを考えてくださっているなと思います。復習の方法も指導してくださるので「この授業さえ受けていれば実力はつくはず」と安心して取り組むことができます。

竹田：中でも印象的なのが、先生方が常におっしゃる「音読の大切さ」です。その練習をより効率的で効果的に行うためにダウンロードして使う音声教材があるんです。まずは音声を聞きながらプリントを見て、声に出して読む。次はプリントを見ないでシャドウイングする。この音声教材も普通の速さと1.2倍のスピードがあってどんどん自分を追い込むことができるんです。このスピードに慣れ

てくると英語を読むのが格段に速くなります。これは東大の英語にはとっても大きなメリットでした。

鈴木：私の場合は、先生方が一人ひとりのことを覚えていてくれることが励みになって…。

竹田：そうそう！こっちが忘れていたのにビックリしちゃうくらいよく覚えていてくださる。

鈴木：やっぱり生徒のことを先生がきちんと把握してくださっているということは大きな安心感になりました。その上で添削をしてくださるわけで、自分がどこを不得意として苦手意識を持っているかということまで理解してアドバイスをしてくさるので話が早いし、こちらも相談がしやすかったですね。今自分が何をすべきかが明確に分かりました。

## **Q：グローバルの特徴、先生の特徴は？**

鈴木：私は数学もやっていました。数学は英語よりも少人数で授業が行われていたため、すぐ質問できるという状況がとてありがたくて、授業前や授業後も一人でずっと先生に質

問し続けるということもありました。どんな質問にも的確に答えていただけました。やはり数学の場合も英語と同じで、生徒のことを先生が把握してくださっているという根本的な部分での信頼関係が一番大きなメリットだったと思います。

竹田：それはもう英語も数学もグノーブルの先生に共通したことだと思いますね。

あと、すごく授業のレベルが高くてなおかつハイスピード。

それから、まわりの人にも優秀な人たちがたくさんいて、しかも先生方が授業中に指名するので、その優秀さを目の当たりに知ることになるため、初めて授業を受けた人は愕然とすることもあるかと思います。グノーブルの授業は甘いものではありません。ただ、この中でしっかりやっていたら、確実に力がつくことは間違いないと思います。

鈴木：私も入った当時は、単語もぜんぜん分からないし読むスピードも人と比べて圧倒的に遅いし、授業中先生に当てられても分からな

いような状態でしたが、諦めずに、先生の指導を聞いてやっていくうちにだんだんついて行けるようになっていったという感じですよ。よく「努力しなくても出来るようになる」なんて広告がありますが、そんなことはなくて、授業についていく努力をすることが何より肝心だと思います。しかも、ただ無闇に努力するのではなくて、正しい努力の仕方というものがあります。そうしたことも先生方はしっかり教えてくださるので、その言葉を信じてどこまで頑張れるかが大事なことはないでしょうか。

竹田：先生の特徴…。まず中山先生は、授業にスピード感があって、すごく分かりやすく教えてくださいます。何より、先生の教養が深く、英文にまつわる背景の話まで聞くことができるととても興味深かったです。

鈴木：ほんとにそうなんです！中山先生、知らないことはないんじゃないかと思うほど何でも知っていて驚いてしまいます。またいつでもパワフルで、どの生徒よりも元気があって、



教えようという熱心さがぐんぐん伝わってくる先生です。

中岡：中山先生は、単なる英文の解釈だけではなく、文章の背景までも説明してくれるので、英語力だけではなく教養までも身についたと思います。それに、どんな質問にも快く、明快に答えてくださって、安心して勉強することができました。

竹田：中2から高1まで英語を教わった関田先生も中山先生同様スピード感があって深いお話もされるし、質問しに行っても優しく答えてくださいます。

あと秋好先生にも習っていました。秋好先生は授業を受けているだけで和んでしまうほど優しい先生です。で、正解すると○を大きくつけてくれて（笑）、私はそういうのがすごく嬉しかったですね。

鈴木：あと、本原先生。

竹田：あっ、そうそう本原先生。

鈴木：本原先生はすごく癒されるんですよね、優しくくて。でも、英作文の添削などはちょっと

信じられないくらい速くて的確。癒される部分もある反面、こと指導ということになると、とても頼りになる先生でした。数学は、最初に習った越川先生は、とてもまめな先生でした。高2の間は基礎問題をやって、提出すると添削して返してくださるんですが、たとえば答えが合っていたとしても解き方はこちらの方がいいというようなアドバイスが結構あったり、授業でやったプリントの解答を細かいところまで注意点を書き込んだものをつくってくださったり、なにしろ事細かにサポートしてくださる先生でした。

長澤先生にも習いましたが、長澤先生は、本当に生徒のことを把握するのが早い先生で、特に苦手な部分をいち早く把握してくださったので安心して授業を受けられました。

難しい問題でもその本質を見ることが大切だということを教えてくださって、だんだんと難問でも抵抗なく取り組めるようになっていきました。

竹田：先生全員にいえることは授業がスピーディ

一だということですね。ですから最初はそのスピードに戸惑ってしまう人もいるかも知れません。授業中に丁寧にノートをとるのはなかなか辛いので、私はプリントの端っこにがぁーっと書いて、授業が終わった後に見直してという感じでした。

## **Q :まわりの生徒に刺激を受けましたか？**

中岡：いやぁ～、ほんとうに優秀な人たちばかりでした。先生がよく指名されるのですが、毎回「ああ、みんなこんなに出来るんだ」と思って、授業の度に気が引き締められる思いがありました。やっぱりまわりの環境って大きいと思います。そんな中で自分も「なんとかついていかなきゃ」という気持ちは常にありましたね。誰か個人に対するライバル意識みたいなものはありませんでしたが、教室に身を置いているだけで気持ちが燃えてきました。グローバルで学んでいる限りライバルといえばみんながライバル。誰に勝った負けたではなく、自分に勝って少しでも上を目指さ

なきやという気持ち自然に芽生えてくる環境でした。

竹田：おそらく、グノーブルが他の進学塾と違うだろうと思うところは、優秀な人の存在を身近に意識できるということじゃないでしょうか。優秀な人がいたとしても、その人がどれほど優れているのかが分からない。グノーブルの場合、先生方と生徒がいい距離感にあって、頻繁に生徒を当てて答えさせるんです。そのとき自然とまわりの人の優秀さが身にしみて分かるんです。これは大きな刺激になりますよね。

鈴木：もう、ほんとうにレベルが高いんです。そのレベルになんとかついていかなくはといつも自分を奮い立たせてました。たぶんこれは誰もがそれぞれに思っていることで、それでクラスの雰囲気自然と締まってきて気が抜けないし、自然と「努力しなくちゃ」と思えるいい環境だったと思います。

**Q：東大は無理かも知れないと思ったことは？**

中岡：それはもう、常にネガティブな思いと、それを打ち消そうというポジティブな面が表裏一体でした。直前期は特にネガティブな気持ちになりやすく、モチベーションを上げることが大変でしたね。でもそういう時は、今までやってきたことをとことん信じてそんな弱気をねじ伏せるしかありません。

竹田：私の場合、高3の11月ころ「東大は無理かも」という思いが頭をよぎりました。私は中2から英語をグノーブルの先生に習っていたので、英語に関してはかなり安定していたんですが、数学が本当にもう壊滅的で、笑っちゃうくらい点が取れなくて（笑）。高3の受験期は勉強時間の半分は数学にあてていたんです。それなのに伸びなくて、かなり落ち込んでいたんです。でも諦めずに人の体験記を読んだりしながら勉強方法を見直していったら、なんとか数学が間に合ってくれて、本番では他の教科の足を引っ張らないくらいまでのところまでどうにか持ち上げることができたという感じです。

でも、これは強く言っておきたいことなんですけど、高3の受験勉強の半分を数学にあてることができたというのは、中2からグローバルで英語を学んでいて英語にかなり大きなアドバンテージを持っていたからなんです。私には英語があったから、苦手教科の学習に時間を大きく割くことができたんですね。これはすごく大きなことでしたね。

鈴木：私は危機感がまったくないタイプで、模試の結果とかもぜんぜん気にしなかったんです。「まあなんとか間に合うだろう」くらいにしか考えていませんでした。

## **Q：これから東大を目指す後輩にアドバイスを**

中岡：ありきたりかも知れませんが、信念を持ち続けることだと思います。諦めないで「絶対行くんだ」という気持ちを持って勉強して、受験に臨むことではないでしょうか。

竹田：私は自分が受験生になるまで、受験生って勉強しかしないものだと思っていたんですが、意外とそうでもないなというのが実感で

す。私自身、テレビドラマも見ていましたしパソコンで遊んだりもしていましたし、でも最低限の勉強はしていたなという感じなんです。

でも、そんなふうにしていられたというのも、中学、高校の時に定期試験などを真面目に取り組んでいたのも基礎が身につけていたからだと思います。

あと、私の場合法曹になれば東大じゃなくてもいい、という思いもあったので「何がなんでも東大」という気持ちを持てなかったというのが正直なところなんです。でも、これから東大を目指そうという人には、ぜひ早い時期から「必ず東大に行く！」と自分を洗脳するくらいの「動機」を見つけて欲しいなと思います。

鈴木：同感です。自分を洗脳するくらいの思いがあれば、勉強に対する取り組み方が変わります。ただ洗脳するにしても、その先に、つまり、自分が東大を出て社会に出た時に何をしたいのかを考えておくと随分違うと思います。

す。それが今竹田さんの言った「動機」だと思います。あと、東大というのは「特別の人じゃなければ入れない」というような思い込みがあって、もしかするとそうした思い込みで東大を敬遠する人もいるかもしれませんが、意外とそんなことないと思うんです。

竹田：そうそう、東大って特別じゃないと思います。たとえば私たちの学校にいる人だったら、全員受かるポテンシャルを持っているでしょうし。

鈴木：うん。だから、負けると思ったら、負けてしまうなと私は思うんです。けっこう試験当日も多くの人がいるのを見て、ただそれだけで萎縮してしまうという人もいるでしょうが、私の場合は逆に、たくさんの人を見たら燃えてきちゃって（笑）、負ける気がしなくなってきた。だからそういう部分でも上手くいったというところはあるんじゃないかと思いますね。

また個人的には、私は親の意見を聞かずに突き進んだところがあるのですが、親の意見に



耳を貸してばかりいると、どこかで言い訳をしてしまう部分も出てくると思うんです。自分の意見をきちんと持って、自分が「これ」と決めたら、誰に何を言われようが「これなんだ」という強い気持ちを持つことが大事だと思います。

中岡：やっぱり、できるだけ早いうちから「東京大学に行く」とか「医者になる」という具体的な目標を持つことは大事だと思います。ただ単に「いい大学に行く」ではなく「東京大学に行く」しかも「東大を出て、こんな職業に就きたい」というような、具体的な目標です。そんな目標を持って、その目標に向かって一直線に走っていくことが大きな力になることは間違いありません。

鈴木：あと、どんなに頑張ってもあまり成績が伸びない人もいると思いますが、よく4時間睡眠とかいって自分に厳しくストイックに頑張ってますという人もいると思うのですが、冷静に考えたときに6時間寝なくては体力が持たない人が、無理して4時間で頑張

ろうとしても、一見自分に厳しくしているように見えて、実際にはその翌日に頭が働かなくて無駄になってしまう。それでは意味がないと私は思うんですね。どれだけ自分と冷静に向き合って、正しい意味で自分に厳しく勉強ができるかが大事だと思います。

また苦手な科目は「やらなきゃ」と思いながらも案外演習の量が少なくなっている場合があると思うんです。そうしたときに、ただやるのではなくて、自分に今何が足りていないのか、どうすべきかをきちんと把握することが大切だと思います。

東大合格発表の2日後（2009年3月12日）

グローバル新宿本館にて